

三つのなぜ

芥川龍之介



ファウストは神に仕えていた。従つて林檎りんごはこう
いう彼にはいつも「智慧ちえの果」それ自身だった。彼
は林檎を見る度に地上楽園を思い出したり、アダム
やイヴを思い出したりしていた。

しかし或雪上りの午後、ファウストは林檎を見て
いるうちに一枚の油画を思い出した。それはどこ
かの大伽藍だいがらんにあつた、色彩の水々しい油画だった。
従つて林檎はこの時以来、彼には昔の「智慧の果」
の外にも近代の「静物」にvariety出した。

ファウストは敬虔けいけんの念のためか、一度も林檎を
食つたことはなかつた。が或嵐の烈はげしい夜、ふと腹
の減つたのを感じ、一つの林檎を焼いて食うことに
した。林檎は又この時以来、彼には食物くじものにもvariety出
した。従つて彼は林檎を見る度に、モオゼの十戒を
思い出したり、油の絵具の調合を考えたり、胃袋の
鳴るのを感じたりしていた。

最後に或薄ら寒い朝、ファウストは林檎を見てい
るうちに突然林檎も商人には商品であることを発見
した。現に又それは十二売れば、銀一枚になるのに

違いなかつた。林檎はもちろんこの時以来、彼には
金銭にもvariety出した。

或どんより曇つた午後、ファウストはひとり薄暗
い書齋に林檎のことを考えていた。林檎とは一体何
であるか?——それは彼には昔のように手軽には解
けない問題だった。彼は机に向つたまま、いつかこ
の謎なぞを口にしていた。

「林檎とは一体何であるか?」

すると、か細い黒犬が一匹、どこからか書齋へは
いつて来た。のみならずその犬は身震いをする、
忽たちまち一人の騎士にvariety、丁寧ていねいにファウストにお時宜
をした。——

なぜファウストは悪魔に出会つたか?——それは
前に書いた通りである。しかし悪魔に出会つたこと
はファウストの悲劇の五幕目ではない。或寒さの厳
しい夕、ファウストは騎士になつた悪魔と一しよに
林檎の問題を論じながら、人通りの多い街を歩いて
行つた。すると瘦やせ細こつた子供が一人、顔中涙なみだに濡
らしたまま貧しい母親の手をひっぱっていた。

「あの林檎を買つておくれよう!」

悪魔はちよつと足を休め、ファウストにこの子供を指し示した。

「あの林檎を御覧なさい。あれは拷問ごうもんの道具ですよ。」

ファウストの悲劇はこういう言葉にやつと五幕目の幕を挙げはじめたのである。

ソロモンは生涯にたった一度シバの女王に会っただけだった。それは何もシバの女王が遠い国にいたためではなかった。タルシシの船や、ヒラムの船は三年に一度金銀や象牙ぞうげや猿や孔雀くじやうくを運んで来た。が、ソロモンの使者の駱駝らくだはエルサレムを囲んだ丘陵さばくや沙漠を一度もシバの国へ向つたことはなかった。

ソロモンはきょうも宮殿の奥にたった一人坐すわっていた。ソロモンの心は寂しかった。モアブ人、アンモ二人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等とうの妃きたちも彼の心を慰めなかった。彼は生涯に一度会つたシバの女王のことを考えていた。

シバの女王は美人ではなかった。のみならず彼よりも年をとつていた。しかし珍しい才女だった。ソロモンはかの女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。それはどういふ魔術師と星占いの秘密を論じ合う時でも感じたことのない喜びだった。彼は二度でも三度でも、——或は一生涯の間でもあの威厳のあるシバの女王と話してたいのに違ちがいなかつた。

けれどもソロモンは同時に又シバの女王を恐れていた。それはかの女に会つている間は彼の智慧ちえを失うからだった。少くとも彼の誇つていたものは彼の智慧かかの女の智慧か見分けのつかなくなるためだった。ソロモンはモアブ人、アンモ二人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃たちを蓄たくわえていた。が、彼女等は何といつても彼の精神的奴隷だった。ソロモンは彼女等あいつを愛撫する時でも、ひそかに彼女等を輕蔑けいびつしていた。しかしシバの女王だけは時には反つて彼自身を彼女の奴隷にしかねなかつた。

ソロモンは彼女の奴隷になることを恐れていたのに違ちがいなかつた。しかし又一面には喜んでいたので

も違いなかった。この矛盾はいつもソロモンには名状の出来ぬ苦痛だった。彼は純金の獅子を立てた、大きい象牙の玉座の上に度々太い息を洩らした。その息は又何かの拍子に一篇の抒情詩に変わることもあった。

わが愛する者の男の子等の中にあるは

林の樹の中に林檎のあるがごとし。

.....

その我上に翻したる旗は愛なりき。

請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力を補へ。

林檎をもて我に力をつけよ。

我は愛によりて疾みわづらふ。

或日の暮、ソロモンは宮殿の露台にのぼり、はるかに西の方を眺めやつた。シバの女王の住んでいる国はもちろん見えないのに違いなかった。それは何かソロモンに安心に近い心もちを与えた。しかし同時にその心もちには悲しみに近いものも与えたのだった。

すると突然幻は誰も見たことのない獣を一匹、入り日の光の中に現じ出した。獣は獅子に似て翼を

拡げ、頭を二つ具えていた。しかもその頭の一つはシバの女王の頭であり、もう一つは彼自身の頭だった。頭は二つとも噛み合いながら、不思議にも涙を流していた。幻は暫く漂っていた後、大風の吹き渡る音と一しよに忽ち又空中へ消えてしまった。そのあとには唯かがやかしい、銀の鎖に似た雲が、一列、斜めにたなびいているだけだった。

ソロモンは幻の消えた後もじつと露台に佇んでいた。幻の意味は明かだった。たといそれはソロモン以外の誰にもわからないものだったにもせよ。

エルサレムの夜も更けた後、まだ年の若いソロモンは大勢の妃たちや家来たちと一しよに葡萄の酒を飲み交していた。彼の用いる杯や皿はいずれも純金を用いたものだだった。しかしソロモンはふだんのようにならなかつた、妙に息苦しい感慨の漲つて来るまで知らなかつた、番紅花の紅なるを咎むる勿れ。桂枝の匂へるを咎むる勿れ。

番紅花の紅なるを咎むる勿れ。

桂枝の匂へるを咎むる勿れ。

されど我は悲しいかな。

番紅花は余りに紅なり。

桂枝は余りに匂ひ高し。

ソロモンはこう歌いながら、大きい豎琴たてことを掻き鳴からした。のみならず絶えず涙を流した。彼の歌は彼に似げない激越の調べを漲たぎらせていた。妃たちや家来たちはいずれも顔を見合せたりした。が、誰もソロモンにこの歌の意味を尋ねるものはなかった。ソロモンはやつと歌い終ると、王冠を頂いた頭を垂れ、暫しばくはじつと目を閉じていた。それから、——それから急に笑顔を挙げ、妃たちや家来たちとふだんのように話し出した。

タルシシの船やヒラムの船は三年に一度金銀や象牙や猿や孔雀を運んで来た。が、ソロモンの使者の駱駝らくだはエルサレムを囲んだ丘陵や沙漠を一度もシバの国へ向つたことはなかった。

なぜロビンソンは猿を飼つたか？ それは彼の目のあたりに彼のカリカチュアを見たかつたからである。わたしはよく承知している。銃いを抱いだいたロビン

ソンはぼろぼろのズボンの膝ひざをかかえながら、いつも猿を眺めてはもの凄すこい微笑を浮かべていた。鉛色の顔をしかめたまま、憂鬱ゆううつに空を見上げた猿を。

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「サンデー毎日 第六年第十五号」

1927（昭和2）年4月1日発行

入力：j.utiyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。